

信州大学教育学部における
学生の満足度調査報告書
(2019年度～2021年度)

信州大学教育学部自己点検・評価委員会
2022年（令和4年）12月

信州大学教育学部における学生の満足度調査報告書目次

はじめに

(自己点検・評価委員長 三崎 隆)

1. 調査概要	1
(1) 調査目的	1
(2) 調査内容	1
(3) 調査対象	2
(4) 調査方法	2
(5) 回収結果	2
2. 調査結果の要約	3
3. 過去3年間の年度別調査の分析	7
(1) 教育学部が目指す教育研究の実現度合	8
(2) 授業内容、実施・評価方法等の満足度	10
(3) 大学での学習と生活の充実度	19
(4) 教育の充実のために何が重要か	22

はじめに

本学部では学部卒業生に対する満足度調査を2004年度から実施し、年度報告書を作成するとともに、3年毎にまとめの報告書を作成してきました。本報告書はその6回目となります。本調査に協力してくださった多くの学生諸氏に感謝するとともに、本報告書の作成にご協力いただいた多数の教職員みなさまに心からお礼を申し上げます。

満足度調査は学部教育改善のための計画・実行・評価・改善といういわゆるPDCAサイクルの一環として長期間にわたって実施してきています。過去の記録を顧みるとき、学生諸君の学びの足跡と先輩諸教職員の努力を彷彿させてくれます。今回もこの3年間を振り返り、学生諸氏の4年間を通しての成長と学部の課題を改めて浮かび上がらせてくれました。

これまでも、この調査により明らかになった問題や課題に対して、学部内で共有し、解決が図られてきています。さらには、本学部の方向性にも関わる長期的な視野での戦略を立てる上でも本調査は貴重であります。

従来からも指摘されてきていることですが、このPDCAサイクルのA、すなわち、改善を何らかの形で「可視化」し発信することは卒業生諸氏にも喜ばれることではないかと思ひますし、現役の学生諸氏にとっても学部教育への主体的な参加へのモチベーションを高めることにもつながると思ひます。さらには、大学がおかれている現状を鑑みれば、このPDCAサイクルのAの成果を発信することは喫緊の課題であると言えましょう。

今後も本調査を継続し、学生諸氏の大学・学部の教育に対する期待に応えるべく、私たちの課題を探るよすがとしていかなければなりません。

2022年12月 信州大学教育学部自己点検・評価委員会委員長
三崎 隆

1. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は信州大学教育学部に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学部のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、学部改革の指針に活かすことを目的とする。

本学部はこれまで長野県における唯一の国立大学法人の教員養成系学部として、長野県を中心とした教育界に多くの卒業生を輩出してきた。卒業生の教員就職率は全国でも上位にランクされているとはいえ、社会・経済状況の急速な変化を背景として、学校教育における教員の教育問題への対応能力が問われている。現状に即応した教育・研究体制の再構築が求められる。

本調査では、教育学部における専門の教育や研究を学生がどのように受け止めているかを把握し、調査結果を生かした教育・研究を探るものである。

(2) 調査内容

本調査では「4年生用」の調査票を作成し3年間ほぼ同じ項目で調査を実施した。調査票の質問項目は、それぞれの特性に応じた質問項目を準備した。具体的には以下に示すとおりである。

【共通項目】

・ 回答者の属性:8項目

入学年度、性別、入学・進学経路、コース及び課程、進路予定、教育学部在学中に修得した免許(取得見込みの教員免許(種類別) ※2021年度質問項目改正)、免許の数合計、教員免許以外で在学中に修得した資格(※2021年度選択肢を一部改正)

・ 教育学部の教育研究についての考え:3項目

本学部が目指している「臨床の知」「附属学校園の活用」「地域社会との連携」に即し教育が行われているかを尋ねた。

・ 講義等の満足度:20項目、自由記述

「1年次の講義科目」「講義・演習科目」「臨床経験科目」「授業のあり方・その他」に区分して、満足度を尋ねた。さらに「やや不満足」「不満足」の内容と改善点について自由記述で尋ねた。

・ 大学での学習と生活:7項目

系統的な授業履修、課外活動・ボランティア経験、学ぶ意義などの状況を尋ねた。

・ 共通教育:5項目

共通教育についての満足度の状況を尋ねた。

・ 教育学部の教育の充実:12項目

単位互換制度、授業の選択、現場経験、シラバス改善、履修カリキュラム、資質・能力の自己評価などの重要性を尋ねた。

・ 教育学部の問題点・改善点:自由記述

「教育学部の施設・設備」「教育学部の教員や事務職員の対応」「所属専攻や分野の組織や指導体制」の3項目について、自由記述で尋ねた。

・ 教育学部に言いたいこと、主張したいこと:自由記述

本調査票に欠けている視点や意見、教育学部のあるべき姿などについて、自由記述で尋ねた。

1. 調査概要

(3) 調査対象

本調査の対象者は信州大学教育学部に在籍する4年生である。調査対象者数は次のとおりである。

2021年度に4年生である者	244名
2020年度に4年生である者	280名
2019年度に4年生である者	250名

(4) 調査方法

調査は学部の自己点検・評価委員会が主体となり、調査目的に即した調査項目を作成した。

調査期間と配布方法については、集計の簡便さを考慮し、Google Formsを活用してきた。2020年度は締め切り期限を延長した上で、再度の連絡を行った。2021年度はeALPSでの活用に変更した上で、締め切り期限を延長して再度の連絡を行うとともに、各コース主任を通じてコースごとの回答促進を図った。その成果の一端として、回収率が徐々に回復傾向にある。回答率の向上を目指して更なる改善が必要である。

(5) 回収結果

年度別の有効数と回答率は次のとおりである。

	対象者数 (人)	回答数 (人)	回答率 (%)
2021年度	244	154	63.1
2020年度	280	151	53.9
2019年度	250	124	49.6

2. 調査結果の要約

2004年度から信州大学教育学部に在籍している学生を対象にして、教育・研究体制に対する考え、カリキュラムや 授業の満足度、大学での学習と生活等についてその実態を把握し、今後の教育学部のあり方を探るための基礎資料を得るとともに、学部改革の指針に活かすことを目的として本調査を実施してきた。2007年度、2010年度、2013年度、2016年度、2019年度の報告に続き、今回は6回目の報告となる。今回の調査結果の要約は以下のとおりである。

◇教育学部の教育研究についての考え

教育研究について、まず、「臨床の知」の理念に基づいた授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2019年度96.0%、2020年度96.7%、2021年度96.7%であり、平均で96.5%と高い値を示した。また「附属学校園の活用」に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2019年度84.6%、2020年度94.7%、2021年度94.2%であり、平均91.2%と高い数値である。このように、授業科目の編成については受け入れられているといえる。「地域社会との連携」については、その目的に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2019年度53.2%、2020年度66.2%、2021年度61.1%である。前回の調査同様に改善の余地がある。

◇講義等の満足度

「A 共通教育科目の内容」については、2019年度には83.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には92.7%、2021年度には92.2%と高い満足度を維持している。

「B 専門科目（臨床科目を除く）の内容」については、2019年度には79.0%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には83.5%、2021年度には91.0%であり、前回の調査での数値より高い値を示している。高い満足度が伺える。また、「やや不満足」並びに「不満足」の回答がいずれも減少傾向にあることも、それを裏付けている。

「E 高校での未履修科目への配慮」については、2019年度には61.3%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には73.5%、2021年度には79.2%であった。満足度が年々増加しており、改善の成果が認められる。

「F 所属分野における専門科目」については、2019年度には92.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には94.1%、2021年度には97.4%と、増加傾向を示しており、9割を超える高い満足度を維持している。

「G 所属分野における研究指導」については、2019年度には91.1%、2020年度には93.4%、2021年度には90.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、9割を超える高い満足度を維持している。

「I 教職科目（臨床経験科目を除く）」については、2019年度には86.3%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には95.4%、2021年度には90.9%と高い満足度を維持している。

「K 教育実習 事前指導」において、2019年度では87.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）、2020年度では90.1%、2021年度では89.0%が満足と回答した。

2. 調査結果の要約

「L 教育実習 事後指導」については、2019年度は86.3%、2020年度は91.4%、2021年度は91.0%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答し、前回の調査結果を上回る高い満足度の値となった。

「M 教育実習」については、受講者の評価は圧倒的に高い。2019年度は満足（「十分満足」「やや満足」）が95.2%、2020年度は90.7%、2021年度は95.5%が満足としていた。特に、十分満足の割合が、3年間平均で60.3%あり、コロナ禍の下においても教育実習そのものの満足度が十分に高いことが示されている。

◇授業の在り方・その他

「P 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫」については、2019年度は70.2%、2020年度は85.4%、2021年度は83.7%が満足としており、満足度が増加し高い値を示した。

「Q 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力をみる工夫」については、2019年度は80.7%、2020年度は93.4%、2021年度は90.9%が満足と回答した。前回の調査結果を大きく上回る高い満足度の値を示した。

「R 成績評価の方法」については、2019年度は80.7%、2020年度は92.1%、2021年度は92.9%が満足と回答した。前回の調査結果を大きく上回る高い満足度の値を示した。

「S 就職や進学のための支援や指導」については、2019年度は65.9%、2020年度は74.8%、2021年度は75.4%が満足としている。前回の調査結果を大きく上回る高い満足度の値を示した。「不満足」の割合も前回の調査結果に比して平均4.3%減少し、3年間の改善の成果が認められる。

◇大学での学習と生活

「1 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた」については、2019年度から2021年度にかけて、87.9%、92.7%、90.3%と順調に伸びてきているので、2012からの新カリキュラムの成果が出てきていると考えられる。これに対して、「6 免許や資格の単位取得に追われ、専門分野の学びが疎かになった」では、否定的な意見（「とてもそう思う」「ややそう思う」）2019年度58.9%、2020年度44.4%、2021年度47.4%と依然高い傾向にある。

このほか「4 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた」では肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が順調に増加して2020年度には91.0%に達した。

「5 大学生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた」でも肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が9割を超えており、2020年度では92.7%に達した。

これらは担当者の努力の結果であると言えよう。

◇共通教育

「B 共通教育を通して、専門教育につながる基礎力がついた」については、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的な回答が2019年度は47.6%、2020年度は63.0%、2021年度は59.1%である。徐々に増加傾向にある。「E 共通教育の教養科目が高年次にも開講されていたら、あなたは受講した」については、肯定的な回答が2019年度は55.7%、2020年度は59.6%、2021年度は61.1%となっており、徐々にではあるが増加傾向を示している。

2. 調査結果の要約

◇教育学部の教育の充実

「2 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る」については、平均が37.1%である。また、否定的な回答（「あまり重要でない」「全く重要でない」）が55%を割っておらず、授業数を絞ることなく広く学びたいと願っているようである。

「4 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす」という設問については、肯定的な回答（「とても重要」「やや重要」）の平均が91.9%と9割を超え、特に2020年度は93.4%、2021年度は93.5%である。すなわち、実践に基づき専門分野について深く学び、それを生かしたいと強く考えていることが読み取れる。

「5 自然教育や環境教育に関連する科目を増やす」については、肯定的な見方が2019年度に79.0%、2020年度に78.1%、2021年度に79.2%と高い値を示している。

「C 小中両免許の取得を必修化している現在の履修カリキュラムを、学修する上で、どのように感じていますか」については、「将来のために必要なので負担ではない」が2019年度66.1%、2020年度64.2%、2021年度63.0%であり、前回の調査結果の平均54.2%を大きく上回った。将来を見据えた学修を考えている様子が見えがえる。

「E 学校教員をはじめとする教育の専門家として、以下の知識と能力を充分培った学生に「学士（教育学）」の学位を授与することとしています。現時点での各資質・能力について、5段階で自己評価してください」については、「十分満足」と「やや満足」を合わせた肯定的な回答が、「A教育の専門家に求められる深い教養に根ざした公共的使命感や倫理観」は平均83.0%、「B教育活動を支え、実現する上で不可欠な専門的知識・技能」平均67.3%、「C他者と協働して教育活動をつくる社会的スキル」平均81.3%、「D理論と実践を往還する省察と改善の態度」平均82.3%と高い満足度の値を示している。学部教育の高い充実度が示唆される。

◇自由記述での意見他

授業内容、実施・評価方法等における問題点については、1年次に専門科目を学びたいという要望は変わらずある。2年次以降の時間割の過密さを理由にあげる意見があるが、学びに向かう意欲を理由とする意見があることに留意したい。現在も、専門科目を1年次に設定しようとする不断の努力が続けられているが、今後も4年間のカリキュラムを継続的に検討していく必要がある。また、「授業改善が必要」であるとの回答には、授業内容と実践との結びつきの明示や、課題やフィードバックの在り方、成績評価の在り方などの指摘がある。臨床経験科目、とりわけ教育実習事前・事後指導についての要望は、コロナ禍であったこともあって前回同様回答が多い。「教授対策が不十分」、「就職支援が不十分」と感じている学生の意見も前回同様にある。

施設・設備の現状とその問題点では、コロナ禍もあってWi-Fi等のインターネット環境の充実に対する要望が急増した。また、図書館については、改装後の使いやすさを評価する記述が多くある一方で、開館時間の延長の要望が前回同様にある。

教育学部の教員や事務職員の対応については、「教員を評価」、「事務職員を評価」する記述は大きな割合を占めるが、その一方で双方への「不満」を示す記述も存在する。教職員への評価は、前回同様、過去3年間を通じて大きな割合を占める。教員に対して、学生の立場に立った対応を望む声がある。さらには、ハラスメントが指摘されていることに留意し、自覚を高めていきたい。

2. 調査結果の要約

専攻・分野の組織や指導体制については、丁寧な指導、個別指導、幅広い指導、教員採用試験対策などを評価する記述が多い。また、コロナ禍の下であったにもかかわらず、手厚くサポートしている現状を評価している記述が見られた。

フリーターキングで記述された内容には本学部で有意義な学生生活を送ることができたという記述が多く見られた一方で、様々な問題点が指摘された。全体として、実践の場と機会を求める意見が多く存在しており、学校現場でのより実践的な学修を求めているようである。学びの内容については、教職だけではなくより広い視野での学びや進路選択上の支援を求める声も前回同様にある。また、オンライン授業を含めてより良いコロナ対策を求める記述もあった。

最後に、本調査に協力いただいた学生諸君に感謝し、調査結果要約とする。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

* 教育学部4年生の進路や取得教員免許の傾向

項目別の調査結果の分析の前に、4年生の進路予定職種等(E進路予定)と、取得見込みの教員免許数(F2取得見込みの教員免許数の合計)の3年間の比率推移のグラフを下に示す。

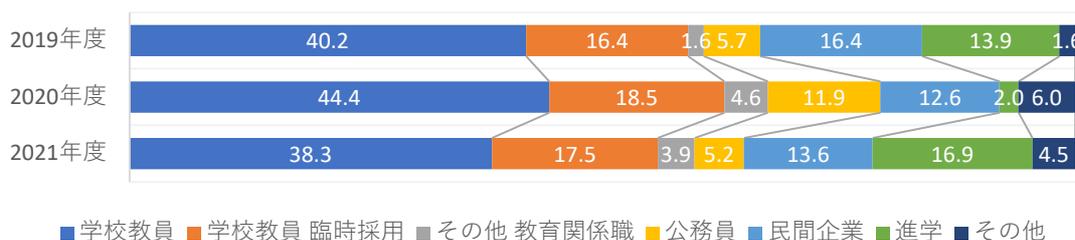
進路予定を見ると、教員(正規)と教員(臨採)はやや変動はあるが、およそ6割前後である。2020年度に6割を超えたことは注目に値する。ただし2020年度の進学者に大幅な減少がみられた。取得見込み免許数については、いずれの年度も、3つが最も多く、次いで4つであり、これらを合わせると7割弱である。2つは増加傾向にある一方、6つは減少傾向がみられた。

■ 年度別比較グラフ (2019~2021年度) (単位はすべて%)

Q1. E. 進路予定

	学校教員	学校教員 臨時採用	その他 教育関係職	公務員	民間企業	進学	その他
2019年度	40.2	16.4	1.6	5.7	16.4	13.9	1.6
2020年度	44.4	18.5	4.6	11.9	12.6	2.0	6.0
2021年度	38.3	17.5	3.9	5.2	13.6	16.9	4.5

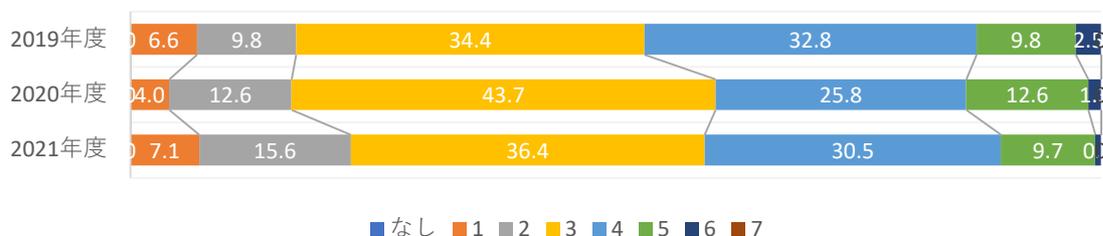
E. 進路予定



Q1. F 2. 免許の数合計

	なし	1	2	3	4	5	6	7
2019年度	0.0	6.6	9.8	34.4	32.8	9.8	2.5	0.0
2020年度	0.0	4.0	12.6	43.7	25.8	12.6	1.3	0.0
2021年度	0.0	7.1	15.6	36.4	30.5	9.7	0.6	0.0

F 2. 免許の数合計



(1) 教育学部が目指す教育研究の実現度合

■年度別比較グラフ（2019～2021年度）（単位はすべて%）

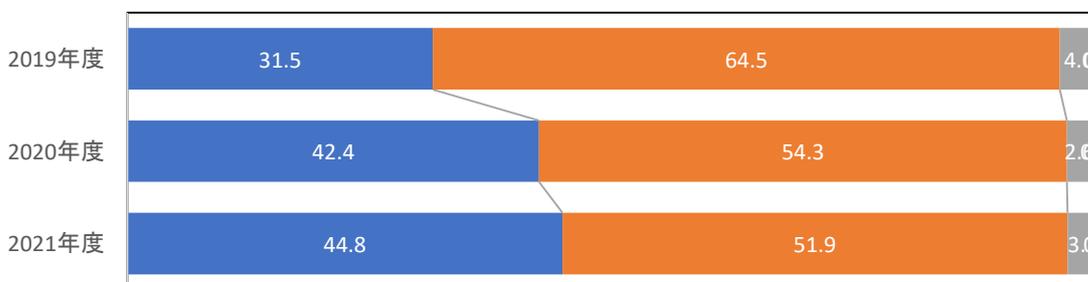
Q2 教育学部の教育研究についてうかがいます。

A 教育学部は「臨床の知」の理念にもとづいた教育・研究体制を目指しています。あなたの受けた専門教育にはこの目的に即した授業科目がありましたか。

	十分あった	まあまああった	あまりなかった	全くなかった
2019年度	31.5	64.5	4.0	0.0
2020年度	42.4	54.3	2.6	0.7
2021年度	44.8	51.9	3.2	0.0

A:「臨床の知」の理念にもとづいた教育研究

■十分あった ■まあまああった ■あまりなかった ■全くなかった

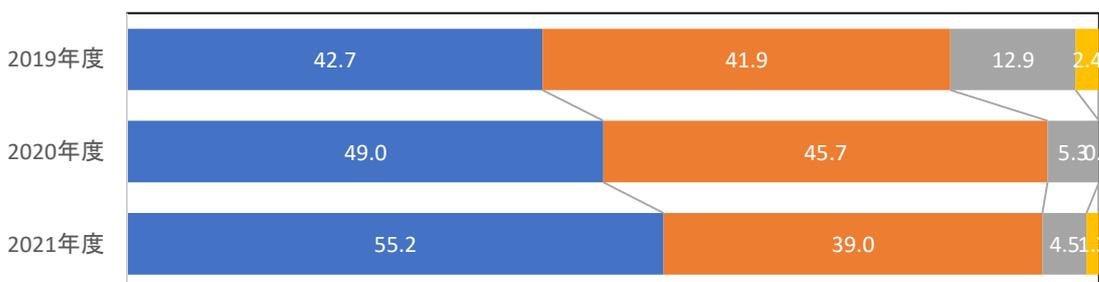


B 教育学部は附属学校園を積極的に活用した教育・研究体制を目指しています。あなたの受けた専門教育にはこの目的に即した授業科目がありましたか。

	十分あった	まあまああった	あまりなかった	全くなかった
2019年度	42.7	41.9	12.9	2.4
2020年度	49.0	45.7	5.3	0.0
2021年度	55.2	39.0	4.5	1.3

B: 附属学校園を積極的に活用した教育研究

■十分あった ■まあまああった ■あまりなかった ■全くなかった

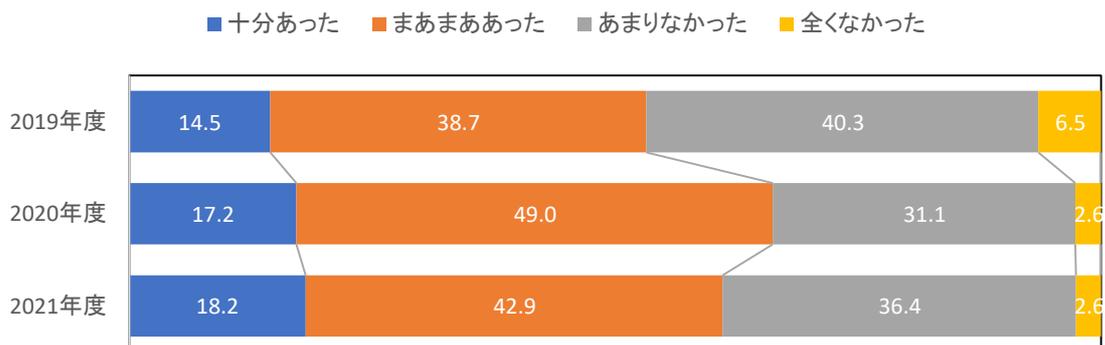


3. 過去3年間の年度別調査の分析

C 教育学部は地域社会と連携した教育・研究体制を目指しています。あなたの受けた専門教育にはこの目的に即した授業科目がありましたか。

	十分あった	まあまああった	あまりなかった	全くなかった
2019年度	14.5	38.7	40.3	6.5
2020年度	17.2	49.0	31.1	2.6
2021年度	18.2	42.9	36.4	2.6

C: 地域社会と連携した教育研究



☆ 教育学部が目指す教育研究の実現度合の分析

教育研究について、まず、「臨床の知」の理念に基づいた授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2019年度96.0%、2020年度96.7%、2021年度96.8%であり、平均で96.5%と高い値を示した。前回調査時（2016～2018年度の平均で88.9%）よりもさらに高い満足度を達成している。「附属学校園の活用」に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2019年度84.7%、2020年度94.7%、2021年度94.2%と、高い満足度を示しているが、年度により変動がある傾向が続いている。「地域社会との連携」については、その目的に即した授業科目が「十分あった」および「まあまああった」との合計回答は、2019年度53.2%、2020年度66.2%、2021年度61.0%で、平均60.2%となり、前回調査時（2016～2018年度の平均で80.3%）より大きく下がっている。2020年度および2021年度はコロナ禍により、地域の教育機関等をフィールドとした教育研究の実施に困難があった分、附属学校と連携した教育研究活動が増加したことが推察される。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

(2) 授業内容、実施・評価方法等の満足度

○ 1年次での共通教育科目、専門科目他の満足度

■ 年度別比較グラフ（2019～2021年度）（単位はすべて%）

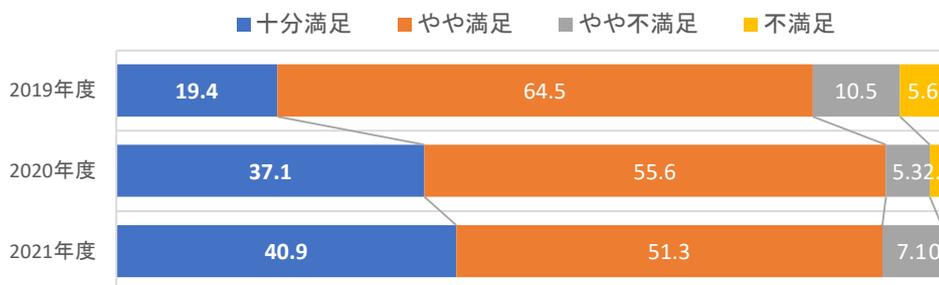
Q3. 次のそれぞれの項目に対して、あなたはどのくらい満足でしたか。

< 1年次の講義科目全般 >

A 共通教育科目の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	19.4	64.5	10.5	5.6
2020年度	37.1	55.6	5.3	2.0
2021年度	40.9	51.3	7.1	0.6

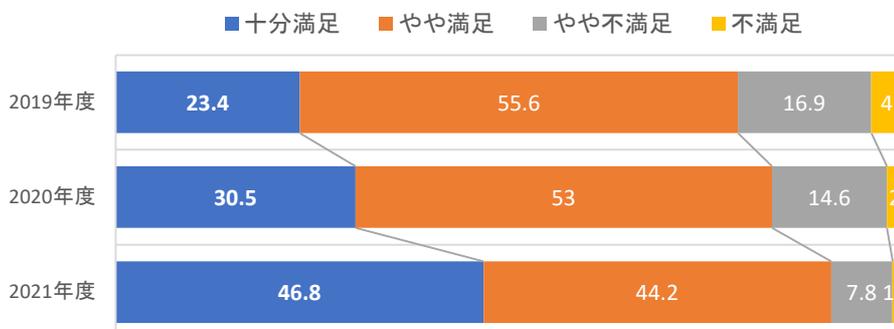
A. 共通教育科目の内容



B 専門科目（臨床科目を除く）の内容

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	23.4	55.6	16.9	4.0
2020年度	30.5	53.0	14.6	2.0
2021年度	46.8	44.2	7.8	1.3

B. 専門科目（臨床科目を除く）の内容

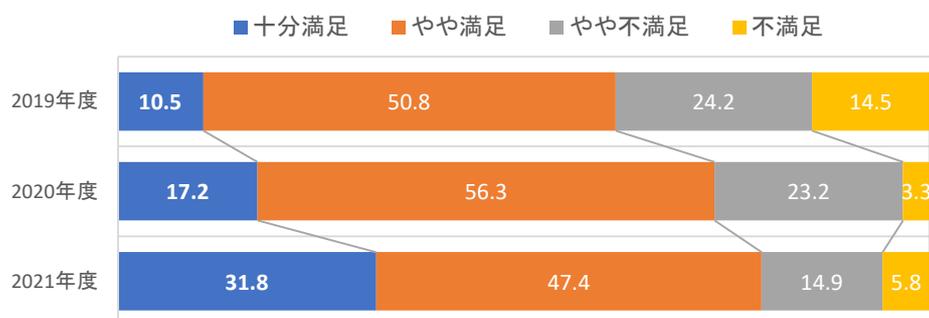


3. 過去3年間の年度別調査の分析

E 高校での未履修科目への配慮

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	10.5	50.8	24.2	14.5
2020年度	17.2	56.3	23.2	3.3
2021年度	31.8	47.4	14.9	5.8

E. 高校での未履修科目への配慮



☆ 1年次での共通教育科目、専門科目他の満足度の分析

「A 共通教育科目の内容」については、2019年度には83.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には92.7%、2021年度には92.2%であった。前回調査時から高い満足度を維持している。

「B 専門科目（臨床科目を除く）の内容」については、2019年度には79%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には83.5%、2021年度には91%であり、高い満足度がうかがえた。さらに、「不満足である」との回答も、3年間を通して減少傾向（4%から2%を経て、1.3%）にあることも注目に値する。

「E 高校での未履修科目への配慮」については、2019年度には61.3%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には73.5%、2021年度には79.2%であった。これは前回調査時に比べ、概ね増加傾向にある。高校での未履修科目への配慮の成果がうかがえる。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

○ 2年次以降の所属分野における専門科目、研究指導、教職科目の満足度

■ 年度別比較グラフ（2019～2021年度）（単位はすべて%）

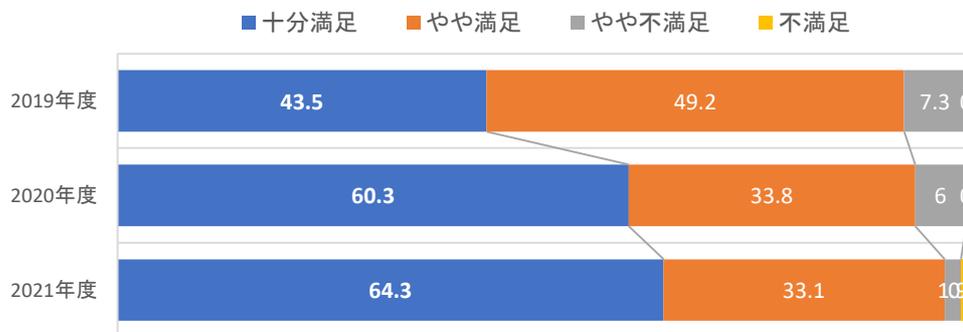
Q3 次のそれぞれの項目に対して、あなたはどのくらい満足でしたか。

< 講義・演習科目（2年次以降） >

F 所属分野における専門科目

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	43.5	49.2	7.3	0.0
2020年度	60.3	33.8	6.0	0.0
2021年度	64.3	33.1	1.9	0.6

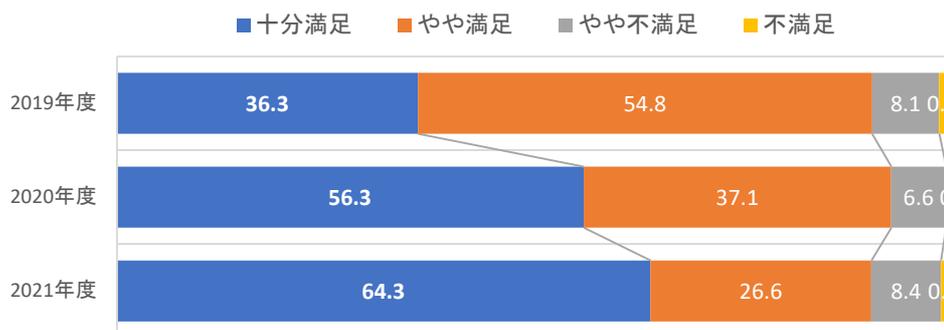
F. 所属分野における専門科目



G 所属分野における研究指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	36.3	54.8	8.1	0.8
2020年度	56.3	37.1	6.6	0.0
2021年度	64.3	26.6	8.4	0.6

G. 所属分野における研究指導

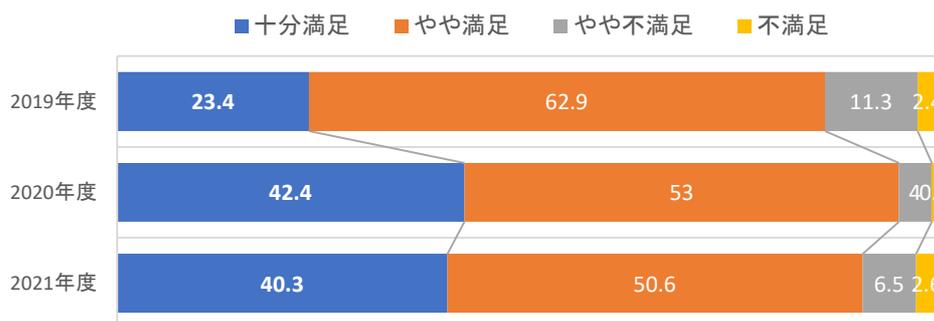


3. 過去3年間の年度別調査の分析

I 教職科目（臨床経験科目を除く）

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	23.4	62.9	11.3	2.4
2020年度	42.4	53.0	4.0	0.7
2021年度	40.3	50.6	6.5	2.6

I. 教職科目（臨床経験科目を除く）



☆ 2年以降の所属分野における専門科目、研究指導、教職科目の満足度の分析

「F 所属分野における専門科目」については、2019年度には92.7%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には94.1%、2021年度には97.4%と、前回調査時と同様9割を超える高い満足度を維持している。

「G 所属分野における研究指導」については、2019年度には91.1%、2020年度には93.4%、2021年度には90.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、前回調査時は8割台で推移していたのに比して、さらに高い満足度が示された。

「I 教職科目（臨床経験科目を除く）」については、2019年度には86.3%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答しており、2020年度には95.4%、2021年度には90.9%と高い満足度を維持している。前回調査時と同様に、安定した高い満足度が示された。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

○臨床経験科目の満足度

■年度別比較グラフ(2019～2021年度) (単位はすべて%)

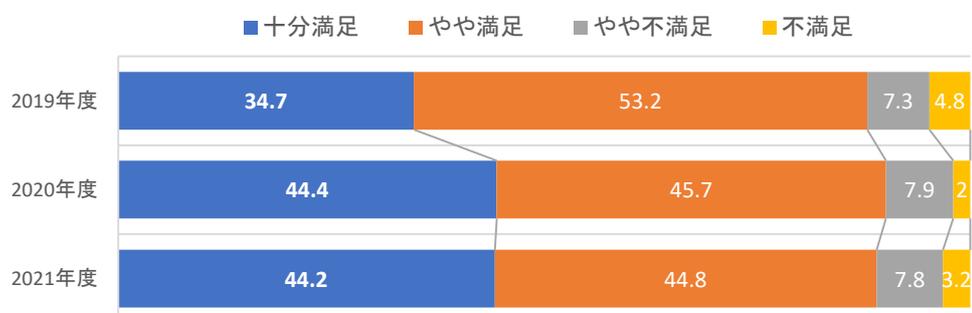
Q3 次のそれぞれの項目に対して、あなたはどのくらい満足でしたか。

<臨床経験科目(2年次以降)>

K 教育実習 事前指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	34.7	53.2	7.3	4.8
2020年度	44.4	45.7	7.9	2.0
2021年度	44.2	44.8	7.8	3.2

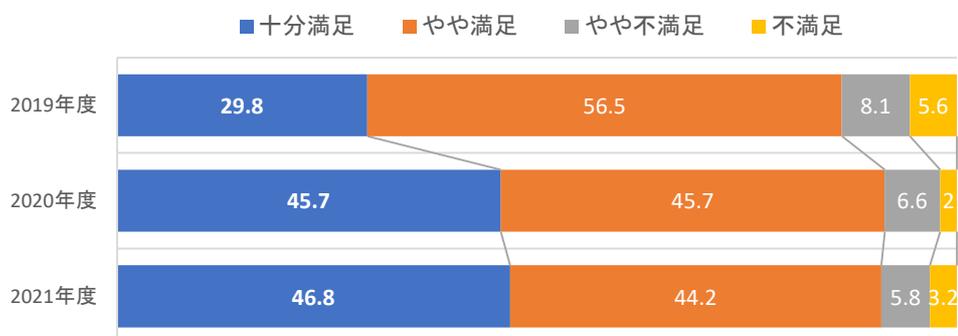
K. 教育実習 事前指導



L 教育実習 事後指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	29.8	56.5	8.1	5.6
2020年度	45.7	45.7	6.6	2.0
2021年度	46.8	44.2	5.8	3.2

L. 教育実習 事後指導

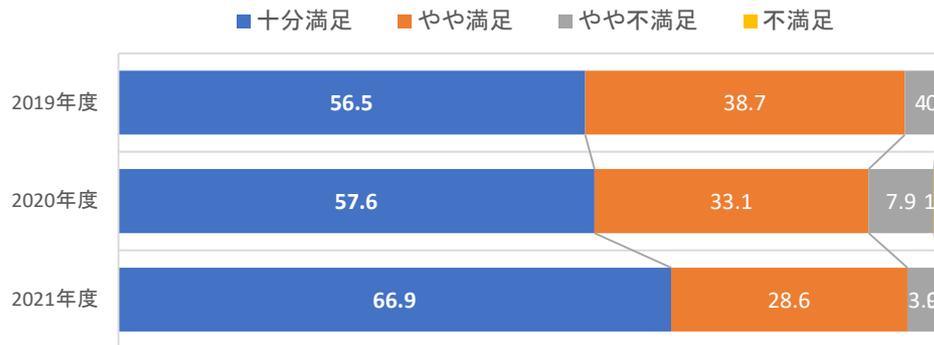


3. 過去3年間の年度別調査の分析

M 教育実習

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	56.5	38.7	4.0	0.8
2020年度	57.6	33.1	7.9	1.3
2021年度	66.9	28.6	3.9	0.6

M. 教育実習



☆ 臨床経験科目の満足度分析

「K 教育実習 事前指導」において、2019年度では87.9%が満足（「十分満足」「やや満足」）、2020年度では90.1%、2021年度では89.0%が満足と回答した。前回調査時より平均で6ポイント高い満足度を維持していることは特筆すべきである。

「L 教育実習 事後指導」については、2019年度は86.3%、2020年度は91.4%、2021年度は91.0%が満足（「十分満足」「やや満足」）と回答した。これも前回調査時より、平均で7ポイント以上も高い値となっており、事前・事後指導とも大きな改善が図られたことがうかがえる。

「M 教育実習」については、受講者の評価は圧倒的に高い。2019年度は満足（「十分満足」「やや満足」）が95.2%、2020年度は90.7%、2021年度は95.5%が満足としていた。特に、十分満足の割合が、3年間平均で約6割あり、教育実習そのものの満足度が十分に高いことが示されている。

3. 過去3年間の年度別調査の分析

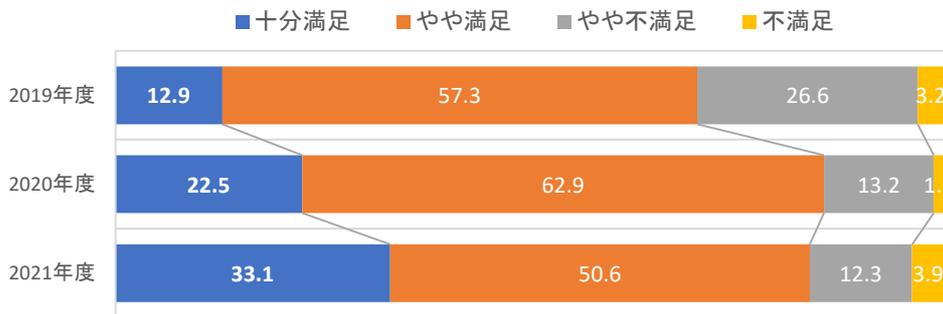
○授業のあり方・その他の満足度

<授業のあり方・その他>

P 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	12.9	57.3	26.6	3.2
2020年度	22.5	62.9	13.2	1.3
2021年度	33.1	50.6	12.3	3.9

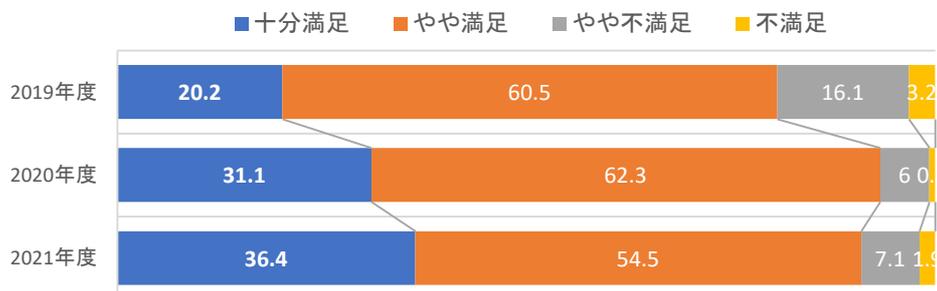
P. 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫



Q 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力を見る工夫

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	20.2	60.5	16.1	3.2
2020年度	31.1	62.3	6.0	0.7
2021年度	36.4	54.5	7.1	1.9

Q. 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力を見る工夫

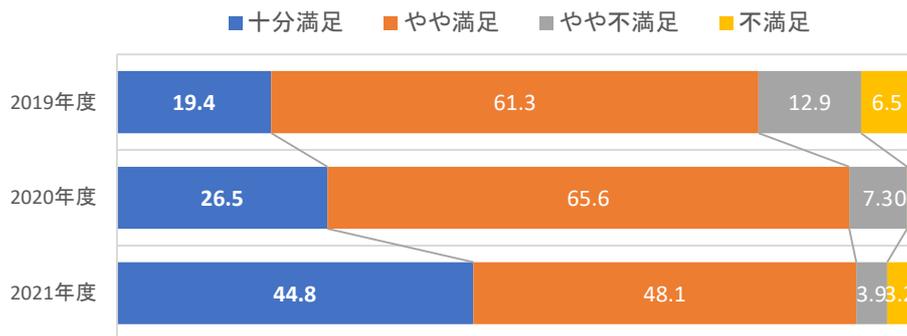


3. 過去3年間の年度別調査の分析

R 成績評価の方法

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	19.4	61.3	12.9	6.5
2020年度	26.5	65.6	7.3	0.7
2021年度	44.8	48.1	3.9	3.2

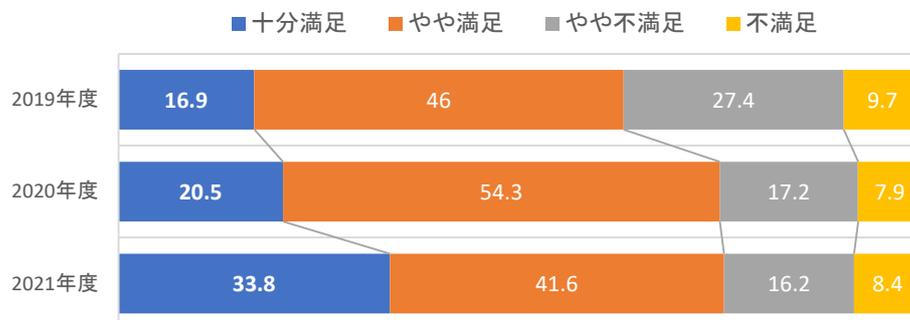
R. 成績評価の方法



S 就職や進学のための支援や指導

	十分満足	やや満足	やや不満足	不満足
2019年度	16.9	46.0	27.4	9.7
2020年度	20.5	54.3	17.2	7.9
2021年度	33.8	41.6	16.2	8.4

S. 就職や進学のための支援や指導



3. 過去3年間の年度別調査の分析

☆ 授業のあり方、その他の満足度の分析

「P 学生の理解度などをみながら授業を進める工夫」については、2019年度は70.2%、2020年度は85.4%、2021年度は83.7%が満足（「十分満足」と「やや満足」）と回答おり、一貫して増加傾向が見られた。前回調査時は7割前後で推移していたことと比べても、改善の取り組みが実を結んでいることがうかがえる。

「Q 適宜課題を出すなどして、理解度・応用力をみる工夫」については、前回調査時は8割前後で満足（「十分満足」と「やや満足」）が推移していたところ、9割台への増加傾向が見られた。2019年度は80.7%、2020年度は93.4%、2021年度は90.9%が満足と回答している。

「R 成績評価の方法」については、前回調査時でも8割以上の満足（「十分満足」と「やや満足」）を維持していたところ、さらに9割台への増加傾向が見られた。2019年度は80.7%、2020年度は92.1%、2021年度は92.9%が満足と回答している。

「S 就職や進学のための支援や指導」については、2019年度は62.9%、2020年度は74.8%、2021年度は75.4%が満足（「十分満足」と「やや満足」）と回答している。前回調査時に6割前後で推移していたのに比べ、増加傾向にある。また、「不満足」の割合も、前回調査時に1割強と高かったのに対し、今回の平均値は8.7%である点からも支援や指導の改善の様子がうかがえる。

(3) 大学での学習と生活の充実度

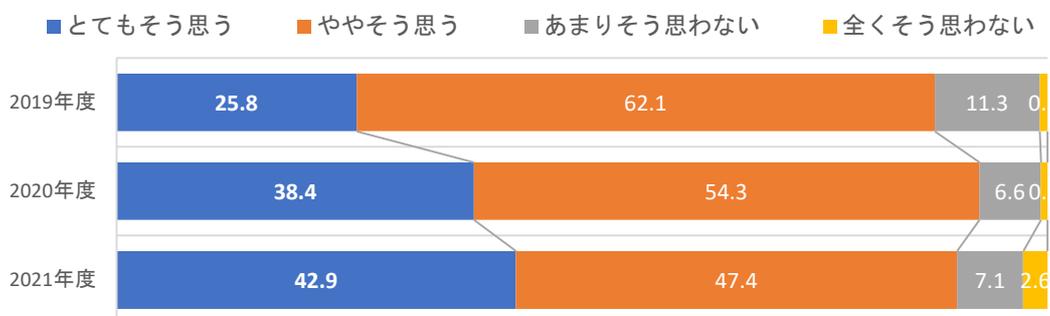
■年度別比較グラフ（2019～2021年度）（単位はすべて%）

Q4 あなた自身の大学での学習・生活についておたずねします。

A1 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2019年度	25.8	62.1	11.3	0.8
2020年度	38.4	54.3	6.6	0.7
2021年度	42.9	47.4	7.1	2.6

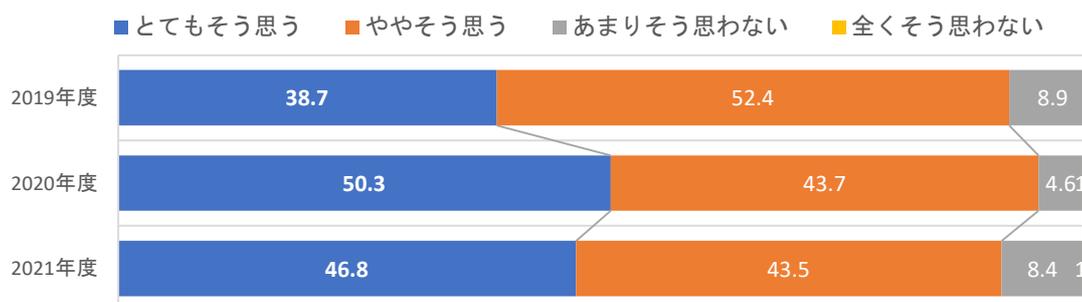
A 1. 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた



A4 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2019年度	38.7	52.4	8.9	0.0
2020年度	50.3	43.7	4.6	1.3
2021年度	46.8	43.5	8.4	1.3

A 4. 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた



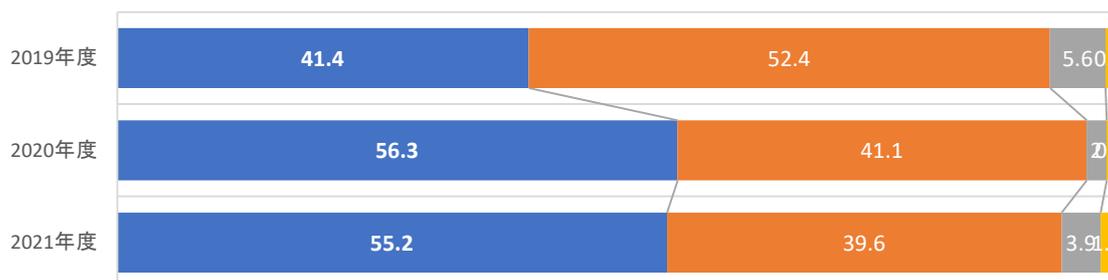
3. 過去3年間の年度別調査の分析

A5 大学生生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2019年度	41.4	52.4	5.6	0.8
2020年度	56.3	41.1	2.0	0.7
2021年度	55.2	39.6	3.9	1.3

A 5. 大学生生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた

■とてもそう思う ■ややそう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない

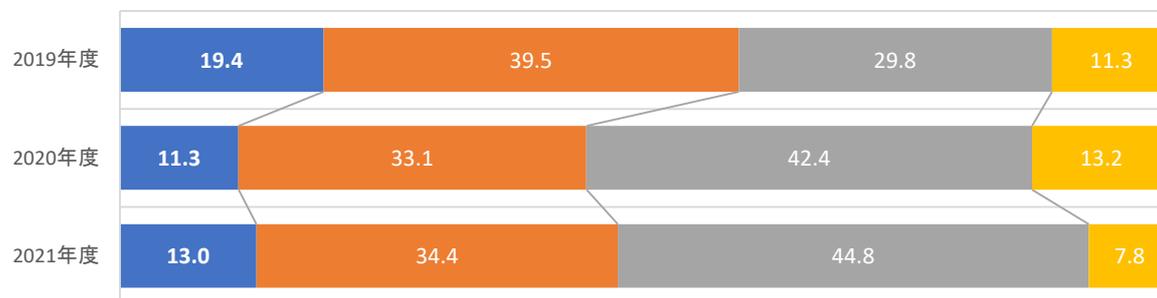


A6 免許や資格の単位獲得に追われ、専門分野の学びが疎かになった

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
2019年度	19.4	39.5	29.8	11.3
2020年度	11.3	33.1	42.4	13.2
2021年度	13.0	34.4	44.8	7.8

A 6. 免許や資格の単位取得に追われ、専門分野の学びが疎かになった

■とてもそう思う ■ややそう思う ■あまりそう思わない ■全くそう思わない



☆ 大学での学習と生活の充実度の分析

「A1 自身の将来を見通し、系統的な履修ができた」の設問は2016年度から2018年度にかけて、肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が79.1%から86.9%と順調に伸びていた。2019年度から2021年度にかけてもその割合は9割前後であり、高い水準を保っている。

「A4 教育実習などの実践的経験と講義内容とを相互に関連させつつ学べた」では肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が2019年度から2021年度まで9割を超える高い水準を維持している。このことは、教育実習担当者の継続的な取り組みの成果であると考えられる。

「A5 大学生活全般を通して豊かな知との出会い、学ぶことの意義を味わえた」では肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が2019年度から2021年度まで、継続して9割を上回っている。とりわけ2020年度は肯定的な回答が97.4%に達している。大学生活を振り返ることを主眼とした本調査において、本項目は最も核心的な質問のひとつであるとも考えられることから、今後も回答の推移に注視し続ける必要がある。

「A6 免許や資格の単位取得に追われ、専門分野の学びが疎かになった」では、否定的な意見（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が、2019年度に6割に近い水準であったところ、2020年度と2021年度は5割を切るところまで減少した。歓迎すべき傾向といえる。

(4) 教育の充実のために何が重要か

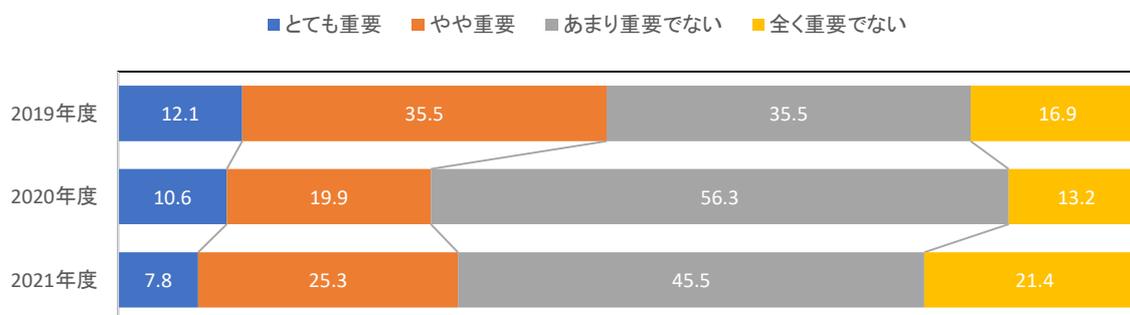
■年度別比較グラフ（2019～2021年度）（単位はすべて%）

Q6 教育学部の教育を充実させるうえで、次の点はどのくらい重要だと思いますか。

A2 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る

	とても重要	やや重要	あまり重要でない	全く重要でない
2019年度	12.1	35.5	35.5	16.9
2020年度	10.6	19.9	56.3	13.2
2021年度	7.8	25.3	45.5	21.4

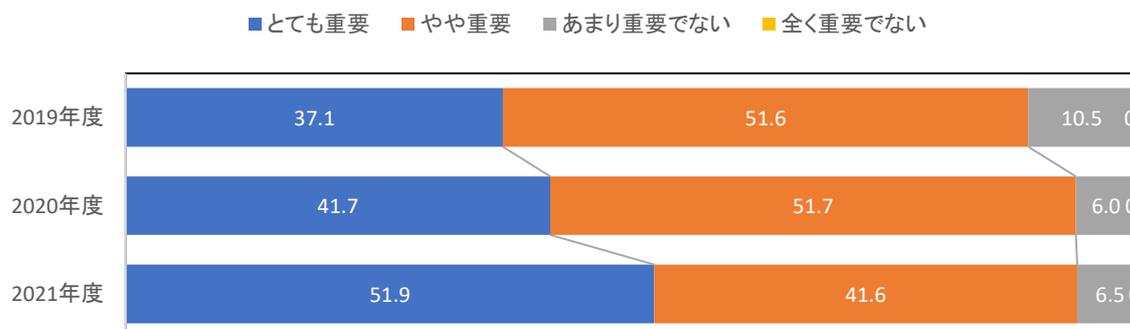
A-2: 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る



A4 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす

	とても重要	やや重要	あまり重要でない	全く重要でない
2019年度	37.1	51.6	10.5	0.8
2020年度	41.7	51.7	6.0	0.7
2021年度	51.9	41.6	6.5	0.0

A-4: 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす

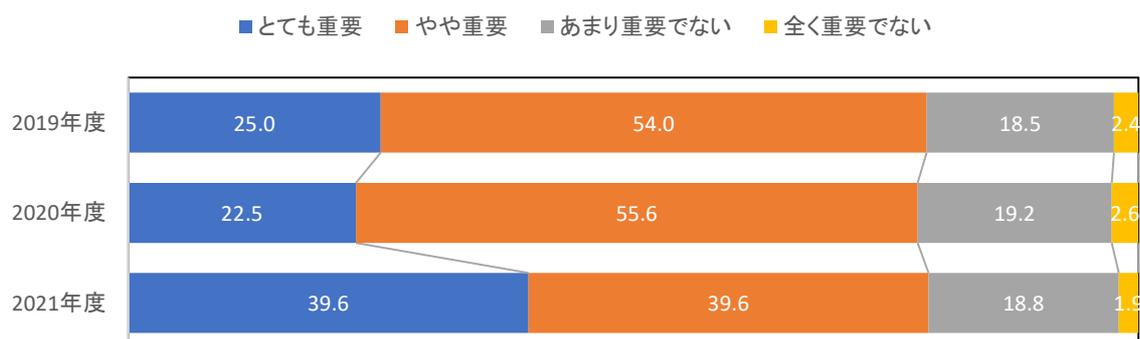


3. 過去3年間の年度別調査の分析

A5 自然教育や環境教育に関する科目を増やす

	とても重要	やや重要	あまり重要でない	全く重要でない
2019年度	25.0	54.0	18.5	2.4
2020年度	22.5	55.6	19.2	2.6
2021年度	39.6	39.6	18.8	1.9

A-5: 自然教育や環境教育に関する科目を増やす



☆ 教育の充実のために何が重要かの分析

「A2 取得単位の上限の厳格化を徹底し、受講科目を絞る」については、肯定的な回答（「とてもそう思う」「ややそう思う」）が、前回の調査（2016～2018年度）では、28.6%、36.5%、43.4%と徐々に増加した。今回の調査では2019年度は47.6%とさらに増加したが、2020年度は30.5%、2021年度は33.1%と2010～2017年度並みに減少した。このことは、長野県公立小学校・中学校・特別支援学校教員採用選考における特別選考「大学推薦選考」の基準の1つに「中学校普通免許状については複数教科の免許状を有している者が望ましい。」が挙げられていたり、「複数教科の中学校教諭普通免許取得」が加点対象となったりしていることにより、受講科目を絞ることよりも、複数教科の中学校免許取得のために授業を履修することを望んでいることが伺える。

「A4 実践経験を専門的な視点を交えて振り返る機会を増やす」という設問については、肯定的な回答（「とても重要」「やや重要」）が、前回（2016～2018年度）までは8割を超えていたことが継続しており、今回の調査でも、2019年度は88.7%、2020年度は93.4%、2021年度は93.5%と高い割合を占めている。このことは、学部の理念「臨床の知」実現に向けて、実践に基づき専門分野について深く学び、それを生かしたいと考えていることが読み取れる。

「A5 自然教育や環境教育に関連する科を増やす」については、前回の調査（2016～2018年度）までの傾向と同様に、2019年度は79.0%、2020年度は78.1%、2021年度は79.2%と8割近い肯定的な回答を得ている。2019年度以前入学生対象の信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の1つとして掲げられていた「環境マインド」として、地域環境に関する理解、環境基礎力、環境実践力を培うカリキュラムの趣旨が十分伝わっていることがわかる。今後は2020年度以降入学の学生から適用されている新しい信州大学学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の1つである「持続可能な社会を実現するための課題に取り組む力」との関係を見ていく必要がある。